

「今、高校教育はどう進んでいるか」

横須賀市立横須賀総合高等学校 校長 熊谷和久氏

・高校教育の総合学科への転換

当校は、この春に第一期の卒業生を送り出した設立4年目を迎えた新しい高校である。新設の高校ではある。当校設立のきっかけは、従来あった横須賀市立の「普通」「工業」「商業」の3つの高校の統合である。したがって、ゼロからスタートしているわけではない。その分、引きずっている課題もある。

・総合学科とは—基本的な考え方と生徒の進路

新しい教育理念のもとで、新しい教育をしようという取り組み。それが総合高校の出発である。したがって、「総合高校」は、これまでの高校をまとめて1つにまとめて「総合化」というのではなくて、「総合学科という新しい教育を進める高校」というところにある。それが「新設」という思想になっている。

基本は生徒の進路の選択にある。高校に入学したばかりの生徒は、自分の進路が決められず迷っている。その結果、高校に入っても、「将来、自分はもうしたらいいか」という目標が見出せないまま漠然と過ごす生徒たち。この際、これまでの高校のスタイルを変えて、新しい高校を創ろう。それが「総合高校」である。

・横須賀総合高校はどうなっているか

校長は当初から民間出身者を公募するということで進められたようである。ただ、教師に関しては、新設とは言うものの従来の3つの高校が一緒になったということで、さまざまな課題を抱えている。たとえば、商業や工業の先生たちは大学進学についてはほとんど進路指導の経験がない。一方、普通科の先生は産業社会についてはわからない。そのため、本来、総合学科が目指した進路ガイダンスがなかなか適切にできない。

・単位取得システムによる教育課程

総合学科では、入ってから自分の将来の進路をしっかりと考えるためのガイダンスを行う。生徒の進路決定に当たってしっかりと勉強できるシステムを提供する。必須科目と選択科目があって、進路に当たってどの授業を受けるか、自分の目標と卒業に必要な74単位が取れるように生徒がスケジュールを作る。生徒は全員がノートパソコンを持ち、教師や仲間との連絡は構内無線LANでフリーアドレス。

・総合学科のカリキュラム

1年次の最初の科目の「産業社会と人間」こそが「総合学科」を象徴するもので、「自分の将来就きたい職業や生き方について深く考えるとともに、その実現に向けて指導や支援をする」科目である。内容は、体験・調査・研究・発表・討論などを通じて展開する。この科目の1年を通して生徒は自分の将来の進路を考え、授業の計画をつくる。

・高校生への期待が私を動かした

実は、高校生の教育に関心を持ったのは、社長として高校生を採用する立場にあったからである。何年か続けるうちに最近の高校生はどこか少しおかしいと感じだした。第一に、夢を持っていない。第二には、何を聞いても「別に」という答えしかない。第三に、採用した生徒の出身学校からは一度も問い合わせが無い。学校は、卒業させてしまったら後は関係ないという態度である。

・教育—誰もが知っていることが、なぜ、改善されないか

学習指導要領の「ゆとり」とは最低レベルを示しただけに過ぎない。「問題解決的な学習指

導」という項になると、いったい、「問題解決」ということが先生方にできるのか。社会のことが基本的にわかっていない先生方には、「問題とは何か」ということが理解できない。それでも文部科学省は指定してくる。先生方にも勉強せよと言いたいが、とても頭が廻らない。

・教科についての課題

学習指導要領では「選択学習の幅を拡大し、生徒の能力に応じた発展的な学習を行う」となっている。たとえば数学である。中学の復習程度の「数学I」だけが必須で、それを1年生でやって終わりである。多少難しくてもそこで考えるから能力が開発されるのに、それを避けていては社会に出て必要な思考力をつけることはできない。何よりも問題は、小中高校教育に一貫性がないことである。

「総合的な学習の時間」というものがある。体験的な学習をすすめているもので、これは上手に使えば効果があると思う。

本校の例を挙げると、「世界平和」についてずっと調べていった生徒がいる。2年生、3年生の時には自分で考えた大掛かりなアンケート調査を行ったり、米国のパウエル長官にも会ってインタビューをしたりした。彼は、それを纏めて論文にして横浜市立大学で発表して入学していった。将来はJAICAで働きたいという強い夢を持っている。

・元気のなくなる教員たちー「ゆとり」によって失った時間のしわ寄せ

「ゆとり」教育によって土曜日が休みになった。教育がうまくいくかどうかは教員次第であるが、その教員に元気をなくさせる問題のひとつは給与の見直しである。2011年のプライマリー・バランスの一環として教師の給与の引き下げが行われ、既に管理職は10%カットが始まっている。なぜ「一律」にそうするのか。部活指導なども含めて、本当に頑張っている先生まで一律カットではやる気をなくす。

免許の更新制度が決まって、10年ごとに講習を受けさせることになった。だが、誰を出させるか、優秀な先生まで対象にしているが、せめて現場を掌握している校長にその権限を持たせてもよいのではないか。

・現場の実情はどうか

さいわい、当校ではPTAの方々も大変積極的に参加していただき、円滑に動いているのだが、実際、それぞれの高校にはさまざまな問題が存在する。

- 不祥事多発・・隠す癖がある。解雇されることはなく、せいぜい転任で済ませる。
- 保護者の高学歴化・・工業、商業出身の先生より、保護者のほうが受験競争を良く知っている。
- 校外(予備校等)情報・マスコミ情報の権威化・・保護者は学校の情報よりも予備校の情報を見る。
- 専門外教科の担当・・先生は、業種と職種の違いも分からないほど産業界の仕事の内容に全く無知。
- 学びの場が多様化している・・本来は社会に出るための集団生活の訓練の場であるはずなのに、安易に進路変更をし、大検で資格をとる。集団の中で人間関係を学ぶことを拒否している。
- 生徒による授業評価制度の導入・・勤務評定につながるという誤解から、生徒に迎合してしまう先生が居る。

・「プロになれ」が合言葉

生徒のプロ、親のプロ、教師のプロと言う事を常々言っている。生徒には学力なくしてプロにはなれない。学力をつけることで身につくことは、人生の選択の幅お広がり、我慢し克服し達成することの喜びを知ること、ものの見方が多面的になる。この3つである。親にもプロになれと

言う。親の中には子離れできない人、自立できない人、子供の食事を作れない人、マナーを守れない人などが居る。

・私が校長としてやっていること

生徒に見せたいプロを意識した生き様。生徒への直接的働きかけ。生徒の不便を解決する。渉外活動。

- 生徒への直接的働きかけ・・・全生徒の名前を覚えて準備する。声をかける、メールで相談を受け付ける、時事問題の解説、部活の応援には必ず行く、朝練への顔出し、授業参観して感想をメールで送る、進路相談や推薦書の自筆、問題生徒の指導、生徒たちへの講演と感想文のやり取りなど。
- 生徒の不便を解決する・・・図書館を土日も開館する、夜間部屋を追い出された全日制生徒の面倒見と定時制生徒との交流、年2回の大学見学ツアーの実施、職場体験や訪問先企業との交渉など。

渉外活動・・・地域との付き合い、マスコミ利用、保護者からのクレーム対応、PTAとのディスカッション、教育委員会との交渉や提言、校長会への参加と協力、小中学校校長との懇親、市役所との付き合い、横須賀市の各種団体への協力などである。